第 122 回 東葛しぜん観察会

春はもうそこまで来ています

勝股政雄（船橋市）

日　時：2016 年 2 月 7 日(日)　10:00～12:00　天気快晴
場　所：２１世紀の森と広場（松戸市）
参加者：一般 13 名　指導員 15 名　担当指導員：勝股、高橋、片岡

サクラは、花が落ちて葉桜の頃になると来年用の芽をつけ、６・7 月頃になると花になる芽と葉になる芽とに分かれる。10 月ごろには、冬の寒さに耐えられるように芽鱗で保護され、休眠に入る。そして、冬に 10 度以下の低温にさらされると成長抑制物質が減り始め、休眠から目覚め（休眠打破）気温が上がるのを待っている。暦の上では、春になったとはいえ、まだ厳しい寒さが続く 2 月初旬に、松戸市の２１世紀の森と広場で観察会を開いた。まず、ふわふわの毛をまとった蕾をつけたコブシを見た。虫眼鏡で見て、手で触ってコブシの冬芽の特徴を知った。樹木では、このほかにカツラ、ミズキ、フジ、ハゼノキ、サクラ、ヒサカキ、ハンノキなどを観察し、サクラと同様、どの木も気温が上がる春を待っているのを実感した。同時に蕾が大きく膨らみ、春がもうそこまで来ていることを知ることができた。

「このサクラの幹にクモが卵を産んであるのですが、わかりますか？」と、投げかけ、探してもらった。皆さん、木を回りながら約 1 分探したが、見つからない。やっと一人が発見した。皆さんは興味深く見つめる。ジョロウグモのお母さんが、タマゴを白い毛で護り、さらに毛にごみをつけてカムフラージュしていることに皆驚いた。「鳥などに食べられないようにするためだろうか？」と、想像した。それから隣の笹藪に産みつけられたオオカマキリのタマゴも見つけ、春に無事に赤ちゃんが出てくるのを願った。

陽だまりを歩いていると様々なロゼットを見つけた。皆で輪になってしゃがみ、じっくり観察した。地面に張り付き、四方に葉を広げているタンポポやハルジオンなどの草花の冬越しの様子を見て、気温が上がってくると、どう姿を変えるかを想像した。

さらに歩いて千駄堀池に来ている鳥たちの観察をした。コガモ、オオバン、カルガモ、カイツブリ、コサギなどの水鳥をフィールドスコープで観てその迫力を感じた。さらに、コサギが盛んに片足を動かし、水をかき回している様子が観察できた。動かした後、嘴を水中に突っ込んで食べている。片足を動かすと、魚を捕らえやすいようだ。

木や草、クモや野鳥などじっくり観察して見てみると、実に興味深いことに気づかされる… そんな感想を聞けて、やりがいを感じた観察会だった。

毛皮のコートに包まれたコブシの花芽の観察